

# 綾本著色《聖徳太子絵伝》第一・二面の想定復元模写研究

東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復日本画

学籍番号 1320927

甘甜

## 研究概要

本研究の研究対象とする綾本著色《聖徳太子絵伝》は、平安時代・延久元年(1069)に、摂津国大波郷に住む絵師秦致真によって描かれたとされている。現在は、法隆寺献納宝物の一つとして東京国立博物館に所蔵されているが、もとは法隆寺東院の絵殿の内壁を飾っていた壁画であり、現存最古の「聖徳太子絵伝」として知られている。全 10 面の大画面綾地に描かれた本作品は、当初の綾地や彩色が残る部分は少ないが、平安後期の大画面説話画の形式を十分に伝えている。ただし当初の壁画様式から少なくとも2回の改装がされており、江戸時代には屏風装、さらに昭和 40 年代頃に 10 面のパネル装にされて現在に至っている。

綾本著色《聖徳太子絵伝》は法隆寺絵殿と共に長い年月の中、幾度の修理と補彩を重ね、今の姿になって現存している。本研究では、過去の修理記録、及び原本に残る痕跡を参考にし、綾本著色《聖徳太子絵伝》の想定復元模写を行い、絵殿に嵌められた当初の姿を再現する。また、文献資料に残されている北宋までの絵絹加工の技法を参照しながら、綾地の加工工程を考察していく。

先行研究では、この綾本著色《聖徳太子絵伝》の図像と、平安時代や鎌倉時代の絵巻に類似点が認められている。本研究では、現存する絵巻の図像を参考にしながら、11 世紀中期の説話絵である綾本著色《聖徳太子絵伝》のオリジナルの作風と彩色技法を提示し、12 世紀の後白河院政期「常盤光長様式」の作風との関連についても探究する。

## 研究意義

1. 現代技術を駆使して、綾本著色《聖徳太子絵伝》の視覚的な復元に取り組み、天明6年に画工吉村法眼周圭充貞が制作した天明模本より当初の姿に近い模本を制作する。
2. 大画面綾地の下地加工の工程を提示する。
3. 建造物の一部としての大画面綾地絵の仕立てを考察する。
4. 綾本著色《聖徳太子絵伝》に認められる線描表現と、12世紀の「常盤光長様式」絵巻の線描表現を比較することによって、その共通点と相違点を見出す。それによって、綾地から紙本へのやまと絵の線描の変化を考察する。
5. 平安時代の大画面綾地絵から紙本絵画への絵画技法の継承と変容を考察する。

## 論文の構成

第一章では、綾本著色《聖徳太子絵伝》の成立、絵巻本と掛軸本絵伝の周辺作品について考察する。中世に聖徳太子説話が流行する以前の平安後期の聖徳太子絵伝と伝暦本文の関連を再認識する。また、先行研究成果を踏まえたうえで、綾本着色「聖徳太子絵伝」の修理経緯、および歴代模本の制作を整理し、絵殿の空間と画面構成を検討する。

第二章では、現状の図像復元の問題点を提示し、天明模本の図像と対照しながらオリジナル部分と補彩部分を分析し、後世の絵巻との共通点をまとめ、本研究の復元方針を立てる。

第三章では、諸先行調査の情報に基づいて綾の復元をし、文献資料と現存する周辺作品の考察、天明模本の熟覧によって本作品の綾の加工を推測し、本来の仕立てを考察する。

第四章では、12世紀の絵巻や山水屏風絵の模写から平安中後期の筆致を習得し、紙本と綾地絵画の相違を確認し、本作品の筆致と彩色の復元サンプルを制作する。その成果を反映して、綾本着色「聖徳太子絵伝」の作風の復元案を作成する。

第五章では、想定復元模写制作に取り込む。

終章では、各章で提起した仮説と、想定復元模写制作を通して得た成果を照らし合わせて再検証し、綾地に描かれた《聖徳太子絵伝》の制作技法の特質についてまとめる。